

好井裕明著

『違和感から始まる社会学 ―日常性のフィールドワークへの招待―』 光文社新書 (2014年)

現地調査、野外調査などを指す“フィールドワーク”という言葉がある。何かを調べたい人が調べたい場所に出かけ、調べたい現実に入りこみ、現実を観察したり（参与観察）、調べたい人から詳しく話を聞き取ったりする（インタビュー）調査方法で、アンケートのような量的調査に対して、質的調査といわれる。著者は2006年に『「あたりまえ」を疑う社会学 ―質的調査のセンス―』（光文社新書）で質的調査とはどういうもので、何が必要であるかを書いているが、本書はその延長線上にあるとしている。前書で示した「あたりまえ」を疑うために、普段やっているけど気づかない営みの持つ秩序や規範、決めつけを読み解いていく態度を、本書では普段の生活の中で様々な機会に感じる違和感に向き合うことから、日常性をフィールドワークしようと誘いかけ、実践を促している。

まず、第1章として「日常性をどう考えるか」というテーマでA. シュッツの日常生活世界論をベースに、いまここにある日常の検討から始まる。さらに、第2章では「フィールドワークすること」において日常を生きる自分を見直す営みを確認し、第3章で日常性をフィールドワークする際の基本的な姿勢として「あたりまえを疑い、見直すということ」を打ち出している。第4章と第5章は「日常性のフィールドワークをめぐる旅Ⅰ・Ⅱ」として“リア充”や“スマホ”、“医者と患者の関係”、“地域猫”などのいくつかの視点をもとに、日常の些細なところでみられる違和感を忘れずに反芻することの必要性や、他者との適切な距離感やつながりをどのように捉えるかが指摘されている。

そして第6章「日常生活批判のフィールドワークへ」では、本書の冒頭で著者が「かつてに比べ、確実にどこかおかしくなっている日常を、いま一度、ありふれた日常として取り戻すには、どうしたらいいのだろうか。私たちが、日常をよりリアルでわくわくしたものとして捉え返す可能性はどこにあるのだろうか。(P.14)」と述べた問いかけへの回答が示される。それは、実際に日常生活において感じた違和感をまっすぐに見つめ、守るべき規範や規律とそうでない規範や規律を峻別して生きていくことで、自分たちの日常生活を少しずつでも確実に変えていくことができるというものである。前書で示した質的調査のセンスをもってフィールドワーカーとなり、個人が社会を変える実践者となる必要があるという著者の思いがうかがえる結論である。

なお、本書には最後に補論が2つ用意されている。1つは「魅力的なモノグラフを味わおう」として比較的最近のフィールドワークにおける研究事例が、もう1つは「質的調査方法論テキストの使い方」として聞き取りや新聞・雑誌の言説分析などの質的調査をするにあたって参考になるテキストが紹介されており、ここにも手に取っておきたい文献が多い。(加藤健志)